

## 第 621 回 新潟放送番組審議会 議事録

### — 議題 —

ラジオ番組  
「ふるさと新潟 祖国日本 還りついた『うつつの国』」



平成 28 年 10 月 26 日

**BSN新潟放送**

## 第 621 回新潟放送番組審議会

1. 開催日時 平成 28 年 10 月 26 日 (水) 午前 11:00~

2. 開催場所 新潟市中央区 新潟放送 本社 6F

3. 委員の出席

○委員側出席者(敬称略・順不同)

委員長	相羽 利子	副委員長	古賀 豊
委員	正道 かほる	委員	佐々木 広介
委員	佐藤 元	委員	小島 良子
委員	細田 康	委員	池田 幸博
委員	服部 誠司		

○委員側欠席者

委員 高木 言芳

○放送事業者側出席者

社長	竹石 松次	営業局長	斎藤 和利
編成局長	島田 好久	報制局長	太田 志信
ラジオ本部長	高坂 元己		

<説明員>ラジオ本部 ディレクター 五十嵐 滋 章

事務局出席者

事務局長 増山 由美子(広報部長)  
事務局員 丹羽 崇(社長室長)

4. 議題

1 報告事項

- ・番組種別公表制度に基づく  
「放送番組の種別と種別毎の放送時間」の報告(4月~9月)
- ・11月の新番組・単発番組について(各局長)

2 審議番組 ラジオ番組

- ・「ふるさと新潟 祖国日本 還りついた『うつつの国』」  
(2016年5月29日(日) 16時~16時55分放送)

## 5. 議事の概要

各局長からの11月度番組報告に続いて、「ふるさと新潟 祖国日本 還りついた『うつつの国』」について審議が行われた。

～番組審議委員の主な意見・質問～

- 日本民間放送連盟賞の優秀賞を受賞しただけあって、意欲的な番組で素晴らしい試みだと思う。取材は非常に大変だったと思うが、ほっておけば忘れられるテーマを取り上げていて、賞賛に値する。複雑な状況に置かれている登場人物の思いが良く伝わってきた。ただし、登場人物が語る中国語が全編吹き替えられていて、本来の印象と異なる点が気になった。このようなテーマをラジオで度々取り上げることはできないと思うが、ぜひ続けてほしい。
- 戦争がもたらしたもの、個人の力だけではなかなか切り拓けない人生を考えさせられた。日本人として認めてもらえなかつた中国残留孤児の方々のモヤモヤ、せつなさを感じた。こうした表情をテレビのように見ることができればよかつた。また、BSN独自のアンケート調査もテレビならもっと楽に伝えることができた。ラジオでは伝わりづらかつた。登場人物が3人出てきたが、注意して聴かないと誰が誰か分からなくなりそうだった。また、タイトルに「うつつ」とつけられた意味が知りたい。
- 身近にこうした人たちがいることが改めて分かった。「うつつ」とは何かと考えながら、番組を聞いたが、今の現実が幸せであるかどうか問題を提起する番組だと思った。日本の生活保護家庭に近いケースと感じながら、何が本当の幸せなのだろうか、判断が難しいと思いながら聴き終えた。
- いつもラジオ番組は楽しい気持ちで聴いているが、今回は中国残留孤児の現状をしっかりと伝えたいという狙いがあり、しっかりと聴かせてもらった。中国残留孤児という言葉すら忘れられた世の中で、苦しんでいる人たちの姿を強く感じた。同情する気持ちや悲しい気持ちを持ちながら聴いたわずか一時間の中に深い問題が浮かび上がった。ラジオのリスナーは色々な立場、色々な観点でこの番組を捉えていると思うが、本当は誰にこの番組を伝えたかったのか？実は国に対して、ではなかつたか？子ども達には遠い歴史である「中国残留孤児」だが、今も問題があることを伝えるため、今後も番組を作り続けてほしい。
- 単なる証言集にとどめず、独自の調査で実態を明らかにするなど事実を淡々と積み重ねた作り方で、抑えた表現が素晴らしい、深く聴きごたえのある番組で、新鮮な感覚を受けた。こだわりをもつて、長期間の追跡取材を通じて問題の根深い部分が解決していないことをくつきりと浮かび上がらせた。戦争の一番の傷跡は今もなお癒えていない。満たされることがない、それどころか、祖国日本で中国人と言われて受け入れ

てもらえない、悲しい現実の言葉が広がっていて、胸を衝かれた。過去の問題ではない、現在進行形として私達の社会の有り方が問われている。中国残留孤児の発言の大半が吹き替えられていたが、他に方法はなかったのか？また、中国残留孤児の今後の展望について言及しても良かったのではないか？秀作だけに、今後も時機を捉えて放送を重ねてほしい。

- 中国残留孤児の過去のニュースは戦争の悲惨を感じさせ、「美談と感動」として記憶に残っている。番組の構成について、ラジオは必要最小限の音楽が必要だと思う。今回は展開に応じて若干使っているが、BGMがほとんどない中で一時間聴かせるのはなかなか難しい。また、タイトルコールも番組が始まって6分くらい経ってからで、それまで台所の生活音などが聴こえていたが、静かなトーンでとまどった。主要な登場人物として2人を取り上げた理由を教えてほしい。
- 普段はウォーキング中や車の中でラジオを聴くが、今回は常日頃聴くラジオの番組とは毛色が違っていて、番組にするには無理があったのではないか。テレビとラジオで同じテーマを取り上げたと聞いたが、映像がないラジオでは制作が難しかったのではないか。芸術作品としては大変素晴らしいが、幅広いリスナーに受け入れてもらうために、こういう作り方は良かったのか？中国残留孤児の問題を世に問うことは大事なことだが、一般のリスナーがどう受け止めたかが気になる。
- 拉致被害者家族のことは度々報道があるが、中国残留孤児のことは番組を聴くまで忘れていた。中国残留孤児の中では戦後は続いている、生きることの意味、生きることは何かを考えさせられた。戦争を起こさないよう私達に今、何ができるか心にとどめるべきだと思う。高齢化した中国残留孤児の生の声を聴けるのは今しかない。難しくて重いテーマのため、あまり受けない番組かもしれないが、後世につないでほしい。
- ナレーションやインタビューの言葉数は少ないが、非常に良い番組だと思った。ぜひ、できる限り違った形でも取材を続けて、今度は深夜に放送してほしい。マスコミの本来の姿がここにあると思う。

～ラジオ本部・五十嵐ディレクターから～

- 大変貴重なご意見を頂き、ありがとうございました。戦争について考えてほしいと番組を構成した。吹き替えをどうするか一番悩ましかった。実際の言葉を全て聞かせて、その後吹き替えでは時間がかかるてしまう。一方で、途中から吹き替えを入れるのも、差し挟むタイミングが難しい。今後の反省点であり、考えるべきポイントだと思う。テレビ番組と共にタイトルをつけたが、「うつつ」については中国残留孤児が現実を生きているようでどうなのか、現在を生きているようでどうなのか、という2つの切り口を始めた。ラジオでの表現方法、作り方の是非についてもご指摘を頂いたがパー

ソナリティが中国残留孤児から証言を引き出し語り合うなど、違う形の可能性も考えていきたい。ラジオはデータ説明を最低限にとどめて、言葉を通じて1つのストーリー、感情を表現することが得意なメディアだと思う。登場人物はもともと報道記者が取材していた方や取材現場で直接打診して了解を頂いた方を取り上げた。また、登場人物が番組の途中で入れ替わり分かりにくかった点については、飽きずに聴けるよう展開したつもりだったが、1人ずつまとめて紹介するやり方もあったと思うので、今後の参考にさせていただきたい。

---

【文責・番組審議会事務局】